



北野宏明

Hiroaki Kitano

最も重要なことは、 ソフトウェアのカルチャーを 育てることだ

人工知能、ロボティクス、そしてシステムバイオロジー。企業で多くの研究開発プロジェクトを手がけてきた北野氏が、2005年から2年間、未踏ソフトウェア創造事業のプロジェクトマネージャとしてかかわることになった。北野氏の観点から「未踏」「スパークリエータ」を語っていただいた。

「未踏のプロジェクトマネージャがどうかって？ ものすごく面白い、個人的にも楽しい」そう話す北野宏明氏（ソニーコンピュータサイエンス研究所取締役副所長／NPO法人システム・バイオロジー研究機構会長）の現在の研究テーマは、システムバイオロジー。生命をシステムとして理解することを目的とする生物学だ。分子生物学の進歩によって、細胞を構成する分子的な部品——遺伝子、タンパク質、RNAなどについてはわかってきたが、それらが時間的にどのように相互作用しているのかはまだわかっていない。システムバイオロジーはいわば、生命の設計原理を、情報処理や実験的な検証を組み合わせて理解しようという試みだ。

自律的に発展できるプロジェクトが要件だ

さて、北野氏がプロジェクトマネージャの仕事が楽しいと語るのは、多彩な人材が応募してくるからである。同氏は、アントレプレナー（起業家）、オープン・イノベーション、アート&サイエンスの3つのテーマで募集し、2005年度の上期と下期で、アートプロジェクト2件、ベンチャービジネスプロジェクト3件、FPGAを使ったハードウェアのオープンソース化プロジ

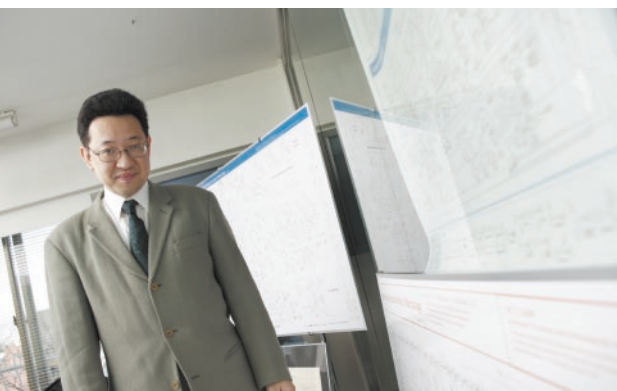
ェクト1件を採用している。

プロジェクトの採用では何を重視しているのだろうか。アイデアが面白いことは自明だ。それが実現可能かどうかという技量とのバランスももちろん必要である。もうひとつ考えるべき点は、「未踏」のプロジェクト期間が1年に満たないことだ。だから最も大事なことは、プロジェクトが終了したあとも自律的に発展していく可能性があるかどうかだ。

応募者のなかには、投資家向けの説明資料のようなものを作成してくる者もいる。ビジネスを志向している場合は、オリジナルなアイデアもさることながら、他に先んじて速く動けるかどうか、そして本人がどのくらい腹を括っているかもポイントだ。面白いアイデアでも、似ていることをほかの誰かが考えているものだ。わずかな出遅れで機会を失う可能性がある。もっとも、ベンチャービジネスが成功するかどうかには時の運もある。北野氏も「もしかしたら全滅するかもしれないけど」と笑う。

採択したプロジェクトに水を向けると、おもちゃ箱のお気に入りを取り出して見せるといった様子で、次から次へと披露された。

遠藤拓己氏のPhonethicaは、同じ発音でも言



葉によって意味が違うことに着目したアートプロジェクトだ。地球上のさまざまな音声言語を集めると、同じ「サバ」でも「鯖」と「ça va」（こんにちは）のように意味の違う言葉が集まる。そこで、同じ発音をキーにして、クリックひとつで異なる言語と文化を往き来して楽しむというものだ。特に絶滅しそうな言語を取り込みたい。プロジェクトを始めてみると、ほとんどの言語には辞書がないことに驚いた。

もうひとつのアートプロジェクト、永野哲久氏のMonalisaは、映像から音声を、また音声から映像を生成するものだ。たとえば、「モナリザ」をビットスキャンして音に変えると、ほとんどはノイズにしか聞こえないが、それをさらにフィルターにかける。もう一度映像に戻す。そんなふうには、フィルターを使って映像の世界と音の世界を変換して遊ぶものだ。

山岡幸作氏らのZDEAは、ライセンス管理や検索精度向上をねらった、Webページ上の画像や音声などの管理・評価システムの提案だ。

下期には、正統派秋葉原系のハードウェア開発者が応募してきた。FPGA（プログラム可能なハードウェアチップ）用の回路情報をオープンソースで配布することによって、ハードウェアもオープンソースで流通しようという試みだ。ソフトウェア開発を対象としている未踏ソフトウェア創造事業のなかでは、異色のプロジェクトになった。その実装例として無線ネットワークを使ったIP電話を開発している。

まだまだ続くが、そろそろ誌面のスペースを気にしなければならない。

ニッチ文化で異彩を放つ人を大事にしたい

北野氏はクリエイターに対して、場合によってはアイデアを出したり人を紹介することはあるが、基本的には議論をするだけだ。

だがそのなかで、プロジェクトの方向性に意見を出すこともある。たとえば、クリエイターが作りたいものが、世の中にインパクトを与えられるものとかけ離れているようなときだ。FPGAを使ったオープンソース・ハードウェアの実装例として、開発者にとってはビデオレコーダを作るほうが技術的にもしよかったとしても、作れるものがモノクロ映像に制約されるのなら、同じ技術でIP電話を作ったほうがいい。

経験に乏しい応募者のコスト見積りは、多すぎたり甘いことがあるから、見極めて補正することもある。ちなみに予算は「ギリギリよりも、ちょっと足りない」くらいがいい。採択のときに北野氏がいちばん気を配る点でもある。

未踏ソフトウェア創造事業では、プロジェクトの成果から起業することを歓迎する空気があるし、ビジネス志向の応募者もいる。しかし、プロジェクト終了後の出口はビジネスだけがすべてではない。明らかに経営者タイプではない開発者もいる。そんな人は技術者として歩いていくほうがいい。ニッチなカルチャーのなかで異彩を放つ、そんな人材を大事にしたい。

『未踏』は非常にクリエイティブなプロジェクトだが、最も重要なことはソフトウェアのカルチャーを育てることではないか」

ソフトウェアカルチャー、ソフトウェア産業を育てる土壌作り、はじめのきっかけ。プロジェクトにはそんな側面もある。

DATA

ソニーコンピュータサイエンス研究所取締役副所長、NPO法人システム・バイオロジー研究機構会長。人工知能、ロボティクス、システムバイオロジーなど、生物の根源の仕組みにせまる研究者。メディアアートへも関心をそそぐ。

